

満足感のない救助活動(1995年3月号掲載・東 泰宏)



1月17日、神戸を襲った地震から10時間が経過している。灘区弓ノ木町、山手幹線沿いのコンクリート造3階建て店舗兼住居に男女2名が、生き埋めとの情報を受け、現場に向かう。地震発生から7時間が生存救出のタイムリミットなのだが、今回大災害で私たちが、救出し生存していた確率は、1割を満たさない。この事案でも危険な時間が迫っている。

現場到着すると家族が倒壊した建物の前に立ち、私たちを見つけるや「親父を助けて下さい。返事はしますし、意識ははっきりしています」かなり興奮気味に言った。だが、情報では男女2名とあったので「もう1名は？」と聞くと、「お母さんは、親父の横で息を引き取りました」と唇を噛みしめていた。

建物は、1階が店舗、2階が事務所、3階が住居で屋上には、家庭菜園と大型収納倉庫2つが並んでいる。1階の店舗は陳列物が散乱し、柱が倒れ、2階については床が斜めになり不安定な状態で、3階は完全に押し潰され進入する事はできない状態である。

私たちが到着する前に家族の方が 2 階の天井に 15 センチ位の穴を開け、上階のベット位置を確認し、東側に頭を向けて寝ている事も分かった。

救出は困難を極めた。3 階部分は地震による屋上の重みに耐えきれず、いつ作業している 2 階に落ちてくるか分からない。また、余震への恐怖感とが重なりなかなか救出が進まない。活動当初、ベットをある程度破壊し救出しようとするが、足場が不安定であり、隊員 2 名がやっと入れるスペースしかないために活動が十分にできず、その上、ベットの鉄製スプリングが邪魔をして上手くいかない。他に良い方法がないかと屋上に上がり、上からの救出を試みるが、大型収納倉庫を移動させるしかなくそれを行う時間もなかった。要救助者に呼びかけるがだんだん声が弱くなってくる。

だが、何か良い方法はないかと、私は隣の東側の建物に進入し壁を破壊して救出できないものかと考えて、中隊長にその旨を伝え、隊員 2 名と 2 階のベランダから進入、その部屋は空き家で木造モルタル塗 2 階建てで高さも要救助者がいると思われる位置であった。「一か八か、やってみる事で何らかの結果は出せる」と自分に言い聞かせた。救出隊を 2 班に分けて 1 隊をベットの破壊に、もう 1 隊が壁を破る 2 つの方法で救出を始めた。

交替で壁を破ること 1 時間、ようやく倒壊建物の東側のコンクリートの外壁が見えた。しかし、見るからに頑丈そうな感じで、破壊する隊員の手は次第に豆だらけになり疲労の色も隠せなかった。

血に染まるハンマーを振りながら、コンクリートを叩いては鉄筋を切り、切っては叩きを繰り返し、ほとぼしる額の汗を拭い、やっとの想いで直径 30 センチの穴が開いた。それは、希望の扉でもあ

った。だが喜びも束の間、強カライトを穴に照らすと幾つも重なる柱やタンスが倒れているのが分かった。予想していたよりもはるかに状態はひどかった。

強カライトを持つ手を肘ぐらいまで入れ、「お父さん、ライトの光が分かるか」と呼びかけた。数分間の沈黙の後「北方向からかすかに見える」と答えた。喜んではいられなかった。いつ余震がくるかと考えると、自然とハンマーを握る手にも力が入り自らも励ますように「大丈夫か。もう少しやぞ」と大声で呼びかけると答える声にも力強さがあった。

ようやく、人一人が抜け出せる大きさの穴が開くと約 1.5 メートル先に横たわる要救助者の姿が見え、動けるのかどうか確かめると「足に何かに乗っており身動きがとれない」という返答があったため、隊員 1 名が穴に入り、引っ張り出した。ようやく救出できたが、その顔はやつれ、一人では立ってられない状態であった。

「ありがとうございました。妻は救出できますか」と隊員 2 名に抱きかかえられながら堰を切ったように尋ねてきた。

隊長から重機が必要との説明を聞き、無言で倒壊した建物に向きなおり、手を合わせる姿に「お母さん、すまん」というお父さんの嗚咽が部屋に響いた。

自然という目には見えない力が、夢や希望、街や愛する人を奪った。『神戸』とは『神の戸(扉)』と書くが、その扉が今、閉ざされたのか、それとも我慢できずに開け放たれたのか。あまりにも神は、我々を傷つけ自然という暴力は大きすぎた。

地震発生後、何度も「今、自分は悪い夢を見ているのだ」と目の前に広がる地獄を理解するのに時間が掛かった。今まで、どのような災害に出会っても、仲間と共に救出、救助、消火活動をし、この仕事に誇りを持っていたが、今回は違った。助けを求めて来ている人々に答える事のできない自分の力の無さを嘆き、自然の恐ろしさに驚異を感じた。しかし、この事案は発生 10 時間が経過し生存率が極めて低かったのにもかかわらず救出できた。それは、奇跡にも近い人間の強さであると感じた。

1ヶ月が過ぎても、未だに余震が続き何が起きてもおかしくないが『防災の街の神戸』を目指し、人々が安心して暮らせる笑顔の絶えない街づくりに微力ながら尽くして行きたい。この街が復興できるその日まで……。